

日本とマレーシアの高等教育連携

—様々な連携の視点から見た MJHEP の取組み—

Cooperation between Japan and Malaysia in Higher Education:

MJHEP' s Efforts from the Viewpoints of Cooperations

クアラルンプール大学マレーシア・日本高等教育プログラム講師 仙石 祐

SENGOKU Yu

(Malaysia Japan Higher Education Program, Universiti Kuala Lumpur)

キーワード：マレーシア、MJHEP、グローバル化

1. はじめに

近年日本とマレーシアは親密の度合いを増している。統計によれば、2013年にマレーシアを訪れた日本人は約51万人で前年比約9%増¹、2014年に日本を訪れたマレーシア人は約25万人で前年比約41%増である²。2013年度に海外への修学旅行先として日本の高等学校が選んだ国は、学校数・人数ともにマレーシアが第4位である³。こうした日本とマレーシアの活発な交流の礎は、親日家として知られる第4代マレーシア首相マハティールが東方政策（Look East Policy）を提唱したことに遡る。

2. 連携の背景となる政策

本節では高等教育連携の背景となっている、マレーシア政府の採る2つの政策について述べる。

1982年マハティールは東方政策を発表した。これは戦後の復興と高度経済成長を成し遂げた日本を

¹ 日本政府観光局（JNTO）、2010年～2014年各国・地域別日本人訪問者数（日本から各国・地域への到着者数）、https://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/marketingdata_overseas_traveler150220.pdf、2015年4月20日最終アクセス。

² 日本政府観光局（JNTO）、2014年12月訪日外客数（JNTO推計値）、https://www.jnto.go.jp/jpn/news/data_info_listing/pdf/150120_monthly.pdf、2015年4月20日最終アクセス。

³ 文部科学省初等中等教育局国際教育課、平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/04/09/1323948_03_2.pdf、2015年4月20日最終アクセス。

手本に、マレーシアが高度な知識・技術のみならず労働倫理・経営哲学を学ぼうとするものである。この政策に基づき2009年までに学部生3068人・高専生1523人・大学院生170人のルックイースト留学生が来日した⁴。なお2012年以降日本に在留するマレーシア人留学生の数は2300人から2400人程度と変わらないが、国別の順位はネパール・タイ・インドネシアに抜かれて8位に後退した⁵。

日本とマレーシアの高等教育連携を語る上で欠くことのできない政策が、マレー系住民優遇政策「ブミプトラ政策」である。「ブミプトラ」とはマレー語で「土地の子」を意味する。主にマレー系・中華系・インド系住民からなる多民族国家マレーシアでは、民族構成上多数を占めながら経済的に劣位にあるマレー系住民を優遇し、貧富の差を解消することによって社会の安定を図ろうとする試みが、様々な分野において行われている⁶。これは高等教育分野においても当てはまり、以下に紹介する4つの機関のうち少なくとも3つはブミプトラ政策の範疇となっている。教育機関がブミプトラ政策の範疇ということは、入学の機会がマレー系住民に限定される、あるいは他系住民は入学が認められても数が制限されるということである。これは教育の機会均等の観点から問題が無いとは言い難いのだが、憲法にはマレー系住民の特別な地位が規定されているため、一概には言えない難しい問題である。

3. 連携する諸機関

本節では日本の高等教育機関と連携する4つの機関を紹介する。なおこれらの機関の他に、日本の国立大学（学部）に留学をさせる帝京マレーシア日本語学院のプログラム、マレーシア政府職員対象の大学院留学プログラム、そして日本語教員養成プログラムなどがあることを付記しておく。

a. AAJ

AAJ(Ambang Asuhan Jepun, マラヤ大学予備教育部日本留学特別コース)はマラヤ大学内に設置された日本留学のためのコースで、日本の高等学校にあたる上級中等学校2年の課程を終えたブミプトラが入学する。学年は2学年だが、近年は入学者数が減少し、1学年100人を切る年もある。予備教育では日本語及び理工系科目の教育が主に日本語で行われ、EJU(The Examination for Japanese University Admission for International Students)と呼ばれる日本留学試験を受けて、日本の国立大学1回生に留学する。

b. KTJ

KTJ(Kumpulan Teknikal Jepun, マラ工科大学国際教育センター東方政策プログラム高

⁴ マレーシア日本人商工会議所調査部, マレーシアハンドブック(2009)。

⁵ 独立行政法人日本学生支援機構, 平成24, 25, 26年度外国人留学生在籍状況調査結果, http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data12_13_14.pdf, 2015年4月19日最終アクセス。

⁶ 岡本義輝, ルックイースト政策30年の功罪と今後の展望, 南山大学アジア・太平洋研究センター報第9号, pp. 27(2013)。

専予備教育コース)はマラ工科大学内に設置された日本留学のためのコースである。上級中等学校の課程を終えたブミプトラ及び非ブミプトラ約90人が入学し、学年は2学年である。ブミプトラが多数を占めるが、近年は非ブミプトラの割合も増やされているようだ⁷。AAJと同じく日本語及び理工系科目の教育が行われたのち、文部科学省試験に合格した生徒が日本の国立高専3年生に進学する。

c. MJIT

MJIT(Malaysia-Japan International Institute of Technology, マレーシア日本国際工学院)はマレーシア工科大学内に設置された高等教育機関である。学部及び大学院を有し、マレーシア人と留学生の比率は3:2程度である。マレーシア人教員の枠が拡大されていく予定だが、日本人教員もおり、日本式の工学教育が行われる。基本日本語コースは必修であるが、授業は英語で行われ、教育はマレーシア国内で完結する。

d. JAD

JAD(Japan Associate Degree, 日本・マレーシア高等教育連合大学プログラム)は予備教育と大学での専門基礎教育をマレーシアで行い、コンソーシアムに加盟する日本の各大学に留学し、その大学の学位を取得するプログラムである。このようなプログラム形態はツイニングと呼ばれ、現在4期目のプログラムはMJHEP(Malaysia Japan Higher Education Program, マレーシア・日本高等教育プログラム)と呼ばれており、筆者はこの教員である。詳しくは次節で述べる。

4. MJHEP の概要

本節ではMJHEPの概要を説明する。

MJHEPに先立つJADのプログラムであるHELP(Higher Education Loan fund Project)は日本の円借款事業として行われたが、MJHEPは100%マレーシア出資で、企業家開発省傘下のマラ教育財団(Yayasan Pelajaran MARA, YPM)が主管する。入学者は年々漸増し、ブミプトラ約150人である。現在予備教育学年(Matriculation(大学入学許可)、マトリクと称する)と大学1回生及び2回生の3学年が学び、大学1回生から機械工学コースと電気電子工学コースの2コースに分かれる。2回生を修了後は日本の大学の3回生に留学する。授業は日本語及び理工系科目が日本語(一部英語)で行われており、主な科目を学年別に表1, 2, 3に示す(表中のMは機械工学コースの科目を表し、EEは電気電子工学コースの科目を表す)。

⁷ 篠崎香織, キャリアパスとしての東方政策と「民族の政治」, JAMS Discussion Paper No. 2, pp. 63.

基礎日本語	工学入門（表現）
工学日本語	英語 1, 2
基礎数学	体育
基礎物理学	イスラム学
基礎化学	道徳

表1 マトリクの主な授業科目

科学技術日本語	物理学 1, 2(講義・演習)
文章表現法	化学 1, 2(講義・演習)
数学 1, 2(微分積分学・線形代数学)	材料力学 1(M)
情報処理 1, 2	電気回路理論 1(EE)
インターネット基礎	英語 3
情報通信基礎	体育

表2 大学1回生の主な授業科目

5. 連携の視点から見た MJHEP の取り組み

本節では MJHEP の取り組みを 4 つの「連携」という視点から捉え、紹介する。

a. マレーシアの大学との連携

MJHEP はクアラルンプール大学 Institute of Product Design and Manufacturing の学科として設置されている。このため大学本部から担当の学部長が派遣されており、校舎に常駐している。学生は大学 2 回生を修了し日本に留学する際にクアラルンプール大学から Diploma を授与されるが、これは日本の短期大学卒業の準学士に相当する。Diploma の取得は、学生が万が一留学後に学位を取得できなかったときのための言わば保険であり、また将来マレーシア国内で希望する職を得る際に有効なのだという。

総合日本語	機構学・機械要素 (M)
日本研究	機械計測 (M)
数学 3, 4(統計学・複素解析)	電気工学実験 1, 2(EE)
制御工学	電子工学実験 1, 2(EE)
制御理論	電子回路 1, 2, 3(EE)
材料力学 2(M)	電磁気学 1, 2(EE)
熱力学 1, 2(M)	高度情報処理 1, 2(EE)
機械工学実験 1, 2(M)	電気回路理論 2(EE)
機械設計 1, 2(M)	電気電子計測 (EE)
機械工学実習 1, 2(M)	TOEIC 英語
機械加工 (M)	最終学年課題

表 3 大学 2 回生の主な授業科目

MJHEPの教育は、クアラルンプール大学を通じてMQA(Malaysia Qualification Agency, マレーシア資格機構)によりモニタリングされており、高等教育機関としての資格認定と教育の質保証が行われている。またMQAは日本の大学評価・学位授与機構と連携もしており⁸、質保証に主眼を置いた協力関係が強化されていくことになっている。

b. 日本の大学との連携

MJHEP は日本国際教育大学連合 (Japan University Consortium for Transnational-education, JACTe) と連携しこのプログラムを進めている。JACTe は学生の留学先となる日本の大学のコンソーシアムであり、参加大学は表 4 の通りである。理工系科の幹

⁸ 独立行政法人大学評価・学位授与機構「当機構とMQAとの間における覚書」, http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/malaysia/no17_mou_niad_mqa_ns.pdf, 2015年4月20日最終アクセス.

事校は芝浦工業大学が、日本語科の幹事校は拓殖大学が務めている。ツィニングプログラムは日本の大学史上初の試みであるため、JACTe と MJHEP の間でカリキュラムやシラバスの入念な検討が行われた。各科目の学期末試験は幹事校に送られ、日本の大学教員による試験前及び試験後の評価が行われる。また教員の雇用については、教員のローカライズを進める YPM の意向もあり多くが現地採用となっているが、両幹事校から派遣されている教員もいる。

岡山理科大学	愛媛大学
近畿大学	九州工業大学
芝浦工業大学	熊本大学
拓殖大学	埼玉大学
東海大学	室蘭工業大学
東京工科大学	山口大学
東京電気大学	上智大学
長岡技術科学大学	豊橋技術科学大学
東京理科大学	名古屋工業大学
明治大学	兵庫県立大学
立命館大学	福井大学

表 4 JACTe の参加大学 (2015 年 4 月 1 日現在)

c. 理工系科と日本語科の連携

初めて日本語を学ぶ学生が多くを占めるこのプロジェクトにおいて、マトリクでこそ主に英語による理工系科目の教育が行われるが、大学1回生から完全に日本語で理工系科目の授業を受けることは、学生にとってかなりのハードタスクである。日本語の専門語彙の解説・補完の必要性は指摘されており⁹、MJHEPでは学生が日本語による理工系科目の授業に十分対応できるよう、日本語教員による「科学技術日本語」などの科目が用意されている。これらの科目では理工系科目の学習に特化した日本語教育が

⁹ 伊藤光雅, マレーシア政府、高専教育プログラムでの物理教育—専門科目教育を補完するための授業取り組み—, 日本物理教育学会, pp. 51, 52 (2008).

行われている。

また進路指導については、理工系教員が学生の希望を調査したうえで、留学する大学の決定に助言を行い、研究したい内容についての確認を行う。そして日本語教員が学生の書いた願書の論理展開や日本語の言い回しをチェックする。このようにして両科の協働による進路指導が行われている。

d. 日本人教員とマレー系教員の連携

本プログラムでは日本人教員もマレー系教員も協力して授業を担当し、学生の指導にあたる（日本人教員以外は全員ブミプトラの教員である）。国別及び科目別による教員構成は表5の通りであり、日本人教員とマレー系教員の数は完全な同数となっている。

	理工系科	日本語科	その他	合計
日本人	12人	15人	0人	27人
マレー系	17人	6人	4人	27人
合計	29人	21人	4人	54人

表5 MJHEPの国別及び科目別の教員構成（2015年4月1日現在）

マレー系教員は理工系科及び日本語科ともに全員日本に留学した経験を持つので、「日本の大学流の」理工系科目の教授法を心得ていると言ってよく、日本に留学する学生の指導により効果をもたらすと考えられる。また日本人教員は若手教員よりベテラン教員が多く、マレー系教員はその逆であることから、大学教育経験の長い日本人教員が若いマレー系教員に教授法の指導を行うこともある。なお教員どうしのコミュニケーションは原則日本語で行われている。

6. 筆者の視点から見た MJHEP の姿

ここまでは MJHEP の制度や仕組みを紹介してきたが、本節では筆者の視点から見た MJHEP の姿を紹介する。多分に主観が入っていることをお含みおきのうえお読みいただきたい。

日本人教員の多くは大学まで YPM が用意したバンで出勤する。校舎は近年の入学定員の増加に伴いやや手狭感はあるが、一般の教室の他、物理学実験室・化学実験室・情報科学演習室・機械工学実験室・電気電子工学実験室、そして大講義室で授業が行われる。1コマ目は8時20分から始まるが、金曜日のみ8時から始まる。これは金曜日の昼には合同でのイスラムのお祈りがあり、昼食休憩が Friday Prayer として長く設定されているためである。普段は Y シャツにネクタイ姿の男子学生たちも、金曜

日は礼拝用の衣装に身を包み登校する。なお女子学生は髪を見せないようにトゥドゥンと呼ばれるイスラムの女性特有の衣装を常に身に着けている。「男女席を同じくすべからず」という教えもあるそうで、教室では男子学生の座るゾーンと女子学生の座るゾーンが自然と分かれるのが興味深い。夕方からの最終コマの体育が無ければ授業は18時前には終わり、教員はバンで退勤、学生たちは校舎に隣接する寮へと戻って行く。授業は月曜日から金曜日までで、週休2日制である。

学生は総じておおらかで人懐っこく、廊下ですれ違えば微笑みとともに流暢な日本語で挨拶をしてくれる。日本の大学ではおよそ考えられぬことで、気持ちが良いものである。また課題を出せばほとんどの学生は真面目に取り組む。日本の大学のように授業の途中でフェードアウトしてしまう子や落第してしまう子はまずいないと言ってよい。授業中に質問を投げかけると、答えは分かった学生の合唱となって、大きな声で返ってくる。講義のような授業形態であっても、インタラクティブな授業を展開しやすい。



図 1 MJHEP の校舎



図 2 現在の大学 2 回生たちと

もちろんあらゆる点で学生に不満が無いわけではない。例えば理系であるにもかかわらず、文字や記号を用いた数学の抽象的な議論や数理的推論には弱い。これは中等教育までの数学が電卓を使っている具体的な数の計算を中心に行っているからなのだろう。地図や図面といった類のものが読めないのもこれまでの教育に原因があるらしい。また学生どうしが分からない箇所を教えあう文化があるらしく、これは教える学生にも教えられる学生にも教育上有益な面もあるのだが、度が過ぎるとレポートの答えが皆一緒などということも起こりうる。教員は学生に助け合いとチーティングの境界を明確に伝えなければならないと感じている。

7. 連携上抱える問題

本節では連携上 MJHEP が抱える問題を指摘し、改善のための出発点としたい。

まず AAJ, KTJ, MJITIT そして MJHEP の間に連携はほぼ無い。また MJHEP と中華系住民が通う大学との連携も、残念ながら無い。これは主管の違いに由来するものと考えられる。マレーシアから日本に留学する学生の教育を行うに当たって、直面しているであろう課題やこれまでの知見が共有され、また教員の人事の交流もあれば、教育上有意義であろうと推測する。

また MJHEP では日本の大学の要求する教育水準を満たし、かつ MQA の要求するそれを満たすため、学生に過度な負担がかかっているようにも見える。例えば大学 1, 2 回生はほぼ毎日全てのコマ (90 分授業) が埋まっているし、2 回生は夏に 2 カ月に及ぶインターンシップのため、夏休みがほぼ全くない。両方の要求を満足するためには仕方がない面もあり、またちゃんとやっけてのける学生には感心することしきりなのだが、大学生であるならば落ち着いた環境で、じっくりと物事を考えるような時

間があってもよいのではないかと思われる。

最後に、ほとんどの学生は留学後に日本の大学の教育に馴染んでいくが、暗記に頼りがちで理系的な思考に慣れない学生の中には、少数ではあるが落第をしてしまう学生もいる¹⁰。学生を日本に送り出す側の教員は、マレーシアの中等教育までが暗記重視で選択式試験が多く、必ずしも数理的推論について十分鍛えられていないという事実を認識し、「日本の大学流の」理工系科目の教育とのギャップを埋める形で、彼らに教育を行うということをしなければならないであろう。

8. まとめ

本稿では日本とマレーシアの高等教育連携を、筆者の所属する MJHEP を例に挙げながら紹介した。現場で教育に携わる一教員として、学生たちの文化・宗教的な背景やこれまでの学びの履歴、またマレーシア特有の教育方法を尊重しつつも、彼らが日本に留学したときに困らないだけの理工系の専門基礎科目の学力と日本語の能力及び日本の文化的な知識を彼らに授け、彼らが将来自分の能力を発揮して希望する未来を選択し、幸せな人生を歩んでほしい、そして日本とマレーシアの懸け橋となって活躍してほしいと心から願っている。

¹⁰ 岡本義輝, マレーシアの AV 企業・設計開発 (R&D) 部門の拡大発展に向けて一理数教育の課題について、国際学力比較 (PASA と TIMSS) を中心に一, 電気学会研究会資料, pp. 4/9 (2007).